台湾の素晴らしい自然・文化資源を知っていただくために

一般社団法人　台湾世界遺産登録応援会
代表理事　八田　修一

1．はじめに

「台湾に世界遺産がいくつあるかご存じでしょうか？」 これは私が講演会やイベント等で最初に決まって投げかける質問だ。「ちなみに日本には昨年登録された佐渡島の金山を加えて26の世界遺産があるのですが・・・」と続けると、台湾をよくご存じの方が風光明媚な太魯閣峡谷や戦前日本が台湾を統治していた時代の文化遺産である阿里山森林鉄道などを挙げて数え出してくださる。しかし残念ながらいま台湾には、世界遺産が一つもない。

本稿は、一人でも多くの日本の皆様に、台湾にはたとえ世界遺産が一つもなくても、世界遺産とするに相応しい価値を有するすばらしい自然や文化資源が沢山あることを知ってほしいと筆をとった。

2．素晴らしい自然・文化資源の数々

台湾には世界遺産に匹敵するような素晴らしい自然・文化資源がたくさんあり、今世紀になって台湾政府はその保護・保全活動に乗り出した。台湾政府文化部文化資産局は2002年から検討を始め、2003年に12箇所、2009年に６箇所を世界遺産候補地として選定した。当会では候補地が有する「顕著な普遍的価値」を広く知っていただくことを活動の中心に据えているため、実際に足を運んで現地を確認することを重視している。また“学んで旅する　旅してまた学ぶ”をコンセプトとしているので、大学の先生や専門家の方々を招いて予備知識をインプットするセミナー“楽習会”を適時開催してきた。2018年から過去５回の訪問ツアー“スタディツアー”を実施し計９箇所の候補地を訪問したので、訪れた台湾世界遺産候補地をここにご紹介する。

1）澎湖諸島

（第一回スタディツアー、2018年９月）

私たちが初めて訪れたのは、台湾海峡の真ん中に位置する澎湖諸島だった。ここには二つの世界遺産候補地『**①澎湖玄武岩自然保護区**』、『**②澎湖石滬群**』がある。馬公市のある澎湖本島は台北松山空港から飛行機で一時間弱のところにある。澎湖諸島はおよそ800万年前から1100万年前に、地球内の沈み込んだプレート（スラブ）で滞留しているスラブが上昇し、上部のマントルと反応してマグマができて盛り上がったものと考えられている。高い山がなく島全体は低い丘状の形状をしており、年中強い風にさらされている土地だが、いたるところに玄武岩の柱状節理（ちゅうじょうせつり）が露出して間近で観察することができる。

柱状節理は玄武岩や安山岩などで、マグマが冷えて固まる際に収縮して主に六角形の柱状の割れ目ができ、蜂の巣に似た形を示した岩石の柱が集まったもの。私たちは“楽習会”に、日本地質学会からご推薦いただいた新潟大学の藤林紀枝教授をお招きしてその生成メカニズムや世界中で見られる地域のことなどを教えていただいた。日本では、兵庫県豊岡の“玄武洞公園”や福井県の東尋坊、宮崎県の高千穂峡など多くの地域で見ることができる。また現地澎湖島では、島の北部にある「小門地質博物館」を訪ね、顔一勤教授からさらに詳しい説明をお聞きした。

次に澎湖島北西部の赤崁碼頭港から船で吉貝島

へ渡り、「石滬文化館」で澎湖科技大学の李明儒先生の説明の後、澎湖石滬群を見学した。「石滬(せきし)」といえば、七美島の「雙心石滬」が有名だが、石滬は干満差の大きい遠浅の海岸部に馬蹄型や半円形に珊瑚や玄武岩を積み上げた受身型の大型漁具で、満潮時に入ってきた魚が潮がひいて出られなくなりこれを網ですくうという伝統的漁法だ。石滬を造るには石を運んできて海に積み上げるため大変手間がかかるため、最盛期には600以上あったが現在では550くらいに減ってしまい、その保護保全が叫ばれている。

澎湖島は二カ所の候補地以外にも、「二崁聚落保存区」、「西台古堡」、保安宮にある樹齢377年のガジュマル「通梁大榕樹」など見どころ満載だった。しかし残念ながら写真でも文字でもお伝え出来ないのは、澎湖島の“風”。強く吹き続けて吹き止むことのないあの風は、やはり現地で体感していただくほかない。

澎湖島・柱状態節理

2）屏東排湾（パイワン）族の石板屋集落

（第二回スタディツアー、2019年10月）

台湾の持つ「人類共通の普遍遺産」を世界の人々と共有するために選んだ次の世界遺産候補地は、『**③屏東排湾（パイワン）族の石板屋集落**』。近年台湾でも最も注目度の高い最南端の屏東県には、パイワン族とルカイ族の伝統家屋「石板屋」がある。石板屋とは、天然の岩石から薄く板状に岩を切り出した素材で屋根を葺いた建物をいう。高雄からバスで春日郷入口へ、ここで四輪駆動ワゴン車に乗り換えて未舗装の山道を１時間ほど走ってようやく「老七佳のパイワン族石板屋集落」に到着した。ここで老七佳聚落文化協会の郭東雄理事長から、50軒ほどの石板屋が立ち並ぶ村の配置から室内の様子まで詳しくご説明いただいた。入村にあたっては人数制限（１日50人まで）がある食事つき学習ツアーに参加できたことも大きな喜びだった。

排湾族の石板屋家屋

石板屋家屋入口の魔除け

屏東県には太平洋戦争前の日本統治時代に、台湾製糖の水利土木技師として渡台した鳥居信平氏が建設した「二峰圳」と呼ばれる地下ダムがある。途中、林後四林平地森林公園には地下ダムの構造を地上で再現した実物大のモデルがあり、鳥居信平氏の研究者として知られる国立屏東科技大学の

丁澈士教授と、鳥居信平氏の孫で会員でもある鳥居徹東京大学教授から詳しい説明がなされ、地下ダムの構造をよく理解した上で現地「二峰圳」と「力力渓」を見学した。

この他屏東県は日台近代史の原点である「牡丹社事件」の舞台でもあるので関連施設等を巡り、最後に屏東県副知事を表敬訪問した。

3）阿里山森林鉄道、淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群

（第三回スタディツアー、2023年７月）

2023年は当会が発足して10年目にあたり、コロナ禍で訪台できなかった三年間を取り戻すため、スタディツアーを７月と11月に２回実施した。７月は、常に会員アンケートで人気のあった『**④阿里山森林鉄道**』と、台北から至近の『**⑤淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群**』を訪問した。

阿里山へは高鐵嘉義駅からバスで濃霧の山道を約４時間かけて到着。阿里山は台湾中南部玉山山脈西方の18座の高山から形成される一帯の総称で、「ひとつの山」ではない。最高峰は標高2663ｍの大塔山で、祝山の見晴台や小笠原山の展望台から日の出を望むことができる。

日本統治時代、この一帯の大森林からヒノキを日本へ大量に輸送するために敷設されたのが阿里山森林鉄道だった。その三重ループ線や連続スイッチバックなどは、既に世界遺産となっている山岳鉄道と比べても決して劣っていない、むしろ勝っていると思われる。残念ながら2009年８月の台風により全線多大な損害が発生し、訪問時は十字路駅から神木駅が不通となっていたが、昨年７月に全線開通した。

もともと阿里山の世界遺産推薦理由はこの「阿里山森林鉄道」だけだったが、阿里山世界遺産協会の郭盈良理事長は、対象は鉄道だけではなくこの地区の「林業文化景観」全体として評価すべきだと訴えている。スタディツアー初日、阿里山生態館でこの阿里山世界遺産協会との交流楽習会を開いたところ、彼らは阿里山のヒノキが生い茂る「檜林区」、それを鉄道で運搬した「鉄道区」、そして木材として加工した嘉義市の「産業区」の３つに大別し、ヒノキが林業として活用されるまでの一連の流れを「文化的景観」として推し進めたいとしていた。阿里山世界遺産協会は国際ICOMOSに入会しており、世界遺産についてはかなり勉強されていると感じた。

当会の10周年記念事業は「千年未来阿里山神木植樹活動」と銘打ち、千年後の未来に阿里山の神木となることを願い小笠原山と祝山の中間あたりから入った山の急斜面に、台湾ヒノキ、ベニヒノキの苗木を植樹した。

ヒノキ苗木の植樹式

加えて日台双方で寄付を募り、翌年６月に農林部林業及自然保育署･嘉義分署へ寄付金を届けた。また阿里山鉄道沼平駅では、日本人陶芸作家大久保真理子さんによる「大切なもの」と題した、老木の木肌から美しい妖精が大切な何かをもっている姿が浮かび上がるモチーフの記念碑除幕式にも参加した。

淡水へは台北からMRT淡水駅へ約40分、バスに乗って10分余りで紅毛城に着き、張建隆先生から解説を受けながら施設内を見学した。淡水は台湾の北西部に位置し、麗しの島フォルモサの中でも古くからの要衝地として知られている。紅毛城は1628年にスペイン人が建設、スペイン人の勢力後退後はオランダ人によって1644年に再建された。入口の南門は1724年に外壁部を増築した際のもので唯一現存していて筑後300年を経過しているという。その後イギリスによって淡水税関が設置され、日清戦争後は下関条約によって日本の統治下におかれるという数奇な運命をたどった。1872年カナダ人のマッケイ（馬偕博士）が布教

活動を始め、西洋式の病院や学校･オックスフォードカレッジ（牛津学堂）を建設した。見学後、交流会で淡江大学の学生の一人が「若い人たちは世界遺産についてほとんど知らないし関心もない」と話したが、台湾の世界遺産登録に向けた活動が台湾内ではまだ社会的関心事にはなっていない現状を実感することとなった。当会の使命は「候補地の価値を世界に広めること」だが、まず台湾内で世界遺産の意味や重要性を広めること、そんな後方支援から当会は応援していきたいと思う。

紅毛城

淡水・清朝英国領事官邸

4）太魯閣国家公園、卑南遺跡及び都蘭山

（第四回スタディツアー、2023年11月）

この年２回目のスタディツアーは初めての東台湾、世界遺産候補地としても観光地としても名高い花蓮の『**⑥太魯閣国家公園**』と、古代の台湾を体験学習できる台東の『**⑦卑南遺跡及び都蘭山**』を訪れた。

台北駅から最新型の自強号特急列車で花蓮へ入った。バスで吉野の日本人村へ向かい吉安慶修院を参観、吉安好客芸術村（旧・吉野神社）では地元の方から大歓迎を受けた。太魯閣管理処・ビジネスセンターでは花蓮県観光局の二名のベテラン日本語ガイドと落ち合い、映像と展示資料で太魯閣が何かをまず学んだ。

太魯閣峡谷

太魯閣渓谷は厚さ1000m以上、距離にして10km以上に及ぶ大理石の岩層が分布して、石灰岩の生成と大理石の形成過程から台湾最古の地質を見ることができる。フィリピン海プレートとユーラシアプレートが衝突し地殻が常に上昇しており、同時に立霧渓の流れによって常に浸食されているため雄大で特殊な地形が形作られている。さらに海抜の高低差が大きく高山で周囲から隔離された環境のため、ここには珍しく特徴のある植物が生息して極めて多様な動植物を育んでいるという。

昨年４月３日に花蓮を襲った大地震（マグニチュード７．７､最大震度６弱）は記憶に新しいが、この地震では18名の方が亡くなりうち３名が太魯閣峡の観光客だった。現在太魯閣国立公園への立ち入りは全面的に禁止されている。訪問した吉安慶修院も大きな被害があり、後日当会からお見舞金をお渡しさせていただいた。

花蓮から台東へはバスで移動し、まず2001年に開館した国立台湾史前文化博物館を参観した。台湾の自然史、先史時代、先住民文化を展示しており、総合的に理解できた。1980年南回り線台東新駅の後方を工事中に地下から墓石棺群数千体が発見された。台湾政府はここを保全することを決め、国立博物館も設立した。また卑南遺跡展示館、

遺址公園、遺跡発掘現場を専門の解説員にお願いして見学したが、台湾にどのように人類が渡ってきたのかという考察だけでなく、広くオーストロネシア（南方語）族の分布についても説明があり、考古学ファンには必見の世界遺産候補地だった。

5）桃園台地の埤塘、烏山頭ダム及び嘉南大圳（大用水路）

（第五回スタディツアー、2024年９月）

今回は私の祖父、八田與一が関わった二つの候補地と台湾南部を中心に巡った。飛行機で桃園空港に近づくと眼下に緑の田畑が広がり、所々たくさんの溜池が太陽に照らされて光っているのをご覧になったことはありませんか？これが**「⑧桃園台地の埤塘」**で、祖父は測量と調査を担当した。桃園空港到着後空港内会議室で、林煒舒先生（1911年の台北洪水に始まる台湾の治水活動を深く分析した「1911、台北全滅」の著者）からお話を伺った。はじめ桃園埤塘は溜池を水路でつないで連動させたもの程度にしか理解していなかったが、桃園埤塘、日月潭、台南の山上水道、そして嘉南大圳が一連の台湾全土の水利政策であることを学んだ。講義後、最寄りの埤塘「青塘園」を見学した。1962年石門ダム完成後、埤塘は本来の灌漑目的は薄れたものの、美しい公園となり街の憩いの場にもなっている。

桃園から台湾高鐵（新幹線）で台南へ、そして**「⑨烏山頭ダム及び嘉南大圳（大用水路）」**へ向かった。祖父は、この灌漑施設建設地の調査・設計そして工事などすべてを担い、10年の歳月を費やして1930年に完成させた。現地では施設を管理する農業部農田水利署嘉南管理処の皆さん、また台湾に30年近く住んでおられる徳光重人氏（北投温泉旅館台湾加賀屋の元総経理。財団法人八田與一文化藝術基金会副執行長）から詳しいご説明をいただいた。烏山頭ダムは、堰堤高56m・長さ1273m・底部幅303m、有効総貯水量１億5000万トンで、1936年にアメリカのフーバーダムができるまでは世界最大の規模だった。堰堤はコンクリート使用を抑えて大部分を粘土・シルト・砂・小石・栗石等の自然の土砂を水圧で固めて作った（セミ・ハイドロリック・フィル工法）。また嘉南大圳の用水路総延長は１万6000kmに及び、灌漑面積は15万ヘクタールを覆った。当時、嘉南平原は洪水・干ばつ・塩害の三重苦にあえぐ不毛の土地だったがこれによって農業用水を行きわたらせた。（株）大成建設が製作したビデオ「民衆のために生きた土木技術者たち」（2005年）には、「與一の視線の先は、常にそこに住む人々の生活があった。與一は、彼らをせめて人並みの暮らしに引き上げたかったのである」と祖父の願いを表していただいた。

候補地以外では、與一の恩師である濱野弥四郎氏が建設した台南山上水道（台南山上花園水道博物館）、安平古堡ゼーランジャ城、王育徳の記念館、飛虎将軍廟、林百貨店などへも参観した。台風接近のため今回は訪問を見送ったが、赤崁楼、孔子廟、湯徳章紀年公園など古都台南には数多くの名所旧跡がある。

嘉南平原と灌漑用水路（photo：陳敏明）

6）棲蘭山ヒノキ林、大屯山火山群

（第六回スタディツアー、2025年11月）

今年のツアー訪問予定地についてご紹介させていただく。今秋訪問を予定しているのは、**「⑩棲蘭山ヒノキ林」**と**「⑪大屯山火山群」**。

棲蘭山檜林は、宜蘭県・桃園県など４県にまたがる地域で、棲蘭山は標高1200～2000mに至る全景10万ヘクタールに達する。本年５月の“楽習会”に森林総合研究所林木育種センターの専門家をお招きして事前に学んだ。世界には７種類のヒノキが分布しているが、台湾には台湾ヒノキと台湾紅ヒノキの２種類が自生しており、特に台湾

ヒノキの材質は抜群に良く多くの巨木「神木」が伐採されたという。1970年から胸高直径１ｍ以上の天然林伐採を退役軍人の団体に委託して行ったが、1992年に台湾政府は天然林の伐採を一切禁止して現在ではその保護に努めているという。

棲蘭山　ヒノキの巨木

台湾三番目の国家公園である「陽明山国家公園」は、台北北西部に連なる大屯山や七星山の総称で、陽明山という名の山があるわけではない。大屯山火山群の噴火記録はないが、最後の噴火が5000年前の可能性があるという報告があり、活火山だともいえる。ここには多くの温泉があるので訪問宿泊を楽しみにしている。

３．終わりに

当会は2013年８月に「一般社団法人　日本から台湾の世界遺産登録を応援する会」として設立され、５年目の2018年４月に名称を現在の「一般社団法人　台湾世界遺産登録応援会」へ変更した。同時に、台湾へ移住した辛正仁初代代表の後を平野久美子第二代代表が受け継いで当会の活動を活性化してきた。私たちが感じていることは「台湾の世界遺産候補地は台湾人だけのものではない、人類全体の宝なのだ。今は出来ることから粛々と進めなければいけない。」これが私たちの出発点だ。初心に戻ってこの活動を続けていきたいと思う。

台湾世界遺産18の候補地にはまだ私たちが訪れていない、この紙面でもご紹介ができていない候補地がたくさん残っている。今後の当会の活動に皆様のご理解、ご協力を切に願う。

※写真提供：台湾世界遺産登録応援会